

蝦夷は古くは「えみし」、後に「えびす」、「えぞ」などと呼ばれ、古代中央政権から見て、主に東日本、北日本に住んだとされる人々に対する呼称です。『日本書紀』などの国史には、大和政権の支配に抵抗する集団として登場することは、よくご存じでしょう。

このような蝦夷とは、いったいどんな人々だったのか、古くから盛んに論じられ、「邪馬台国問題」と並んで日本古代史永遠の謎とさえ言われてきました。

今回は、私がかつて1970年代の終わりごろに書いた「蝦夷論の系譜」という小論を改めて読み返しながら、その当時までの蝦夷論の歩みを整理・再考してみることにしました。

私事に涉って恐縮ですが、じつは、この小論を書いていた80年代から、多忙を極めるようになったうえ、近年は縄文世界遺産の登録に関わったりで、やむなくそのままになっていたテーマなのです。本日このような機会を頂きましたので、改めてとり上げて皆さんと一緒に考えてみようと思った次第です。

振り返ると、今から83年前に蝦夷地に生を受け、己の故郷に弥生文化のないことを知ったショックから北方考古学を学び始め、人生のほとんどを東日本に生き、関東と東北の境の福島、それも、かの天王山遺跡を擁するこの白河の地にご縁を頂いた私個人にとって、自分自身を含め「日本人」の問題を考えるうえで、これは、とてもとても面白く、大切なテーマだと、じつは長いあいだ心の中で温め続けてきた問題なのです。しかも、このところ縄文文化に接する機会が多かったので、ますますその感を強くしているのです。

#### 「蝦夷」は、歴史書にどう書かれてきたか

478年『宋書』「倭国伝」 倭王武「東は毛人を征すること五十五国・・・」

『日本書紀』景行天皇40年7月16日条「其の東夷の中に蝦夷是れ尤も強し・・・」

658年『日本書紀』齐明天皇4～6年条、阿部臣比羅夫の北航、蝦夷と接触、肅慎と交戦。

659年『日本書紀』齐明天皇5年7月3日条「伊吉連博徳書」第4次遣唐使、道奥の蝦夷男女二人を唐の天子に献上。天子と使人の問答。

762(天平宝字6)年、多賀城碑「去蝦夷国界一百廿里」

奈良末～平安初期 坂上田村麻呂(～811)と阿弭流為(～802)の活躍

811(光仁2)年、文室綿麻呂、蝦夷征討終了宣言

8～9世紀(平安初期)、空海『遍照発揮性靈集』「毛人羽人が鬣中に骨毒の箭を挿著」

10世紀、蝦夷(えみし)の表記が見られなくなる。

12世紀(平安後期)、『夫木和歌抄』巻第二十三「千島のえそかつくるなるとくきのや」

14世紀半ばの延文年間『諏訪大明神絵詞』「蝦夷カ千嶋」について詳しい記録。

1457(長祿1)年、コシャマインの戦い

1482(文明14)年『成宗実録』夷千島王遐叉が朝鮮王に使者を送り、大蔵経を求める。

1669(寛文9)年、シャクシャインの戦い

1720(享保5)年、新井白石『蝦夷志』

## 蝦夷論の系譜を辿る

### I 期 攘夷思想的アイヌ説の確立

江戸～明治 新井白石、シーボルト父子、E.S.モースらの日本人論、小金井良精と坪井正五郎による「アイヌ・コロボックル論争」。明治・大正前期の「日本石器時人(先住民) = アイヌ」説など、多分に排外主義・攘夷主義的な蝦夷アイヌ説が盛ん。

1916(大正5)年、喜田貞吉『奥羽沿革史論』はこの期の集大成。

### II 期 アイヌ説の全盛と国家主義的日本人説の台頭

大正後期から昭和20(1945)年の第2次世界大戦敗戦まで。大正6年、長谷部言人の「蝦夷はアイノなりや」によりアイヌ説に異議。論も深まったが、「分かりやすい」アイヌ説も整備され、いよいよ全盛となる。ところが、アジア太平洋戦争とともに、昭和19年の清野謙次『日本人種論変遷史』に見る国家主義的な非アイヌ説も出現。

### III 期 「戦後民主主義」の風潮の中での非アイヌ説の展開

戦後、ようやく厳密な文献批判と、科学的な歴史研究の態度と方法が広く理解されるようになった時期から1950(昭和25)年の平泉中尊寺の藤原氏四代の学術調査を経て、1956(昭和31)年の古代史談話会による『蝦夷』の公刊まで。戦前まで隆盛だった蝦夷アイヌ説が疑われ、あるいは批判されて非アイヌ説、反・アイヌ説、あるいはいわば不可知論や超然主義が主流を占める。そして蝦夷論の主要関心事は種族論を離れる。伊東信雄など、結果として戦前戦中の国家主義的雰囲気の中で形成されていた非アイヌ説的方向が戦後の科学主義的・実証主義的風潮の中に受け継がれ、大勢となっていった。上記『蝦夷』はこうした時代の傾向をよく示している。

### IV 期 実証主義的辺民説の盛行

1950年代後半から1960年代。何と云っても、III期以来の非アイヌ説の立場でこれを見事に体系づけた古代史の高橋富雄こそは、この時期の中心的存在であろう。しかしその陰に隠れて、東洋史、言語学、民族学といった分野からアイヌ説やそれに近い見方も表明されている。たとえば1960年代前半までに精力的に書かれた清水潤三のアイヌ説は注目すべきであろう。要するに、アイヌ説と非アイヌ説が自由に提唱され、しかし、あまり互いに噛み合うことがなかった、そういう時期であった。それらの諸説は1970年の児玉作左衛門『明治前日本人類学・先史学史——アイヌ民族史の研究(黎明期)——』によく整理され、紹介されている。なお、この時期いよいよ胆沢城、秋田城、多賀城跡の本格的な発掘調査が開始されたことも重要である。

#### V期 1970年代「ネオ・アイヌ説」の台頭

ほぼ1970年代。歴史、考古、民族、言語、人類など、各関連分野で新しいデータの着実な集積と吟味がなされ、論が深められた。アイヌ説、非アイヌ説を問わず、等しく高橋富雄の『蝦夷』をどう評価し、批判するかが、この時期の主要な課題だった。そしてその結果、新しい資料の開拓と相まって、伝統的なアイヌ説・非アイヌ説を踏まえながらも、いわばこれらを止揚する努力も見えた。なお、1976（昭和51）年の志波城跡発掘をはじめ、東北各地で発掘調査が盛んになる。

そしてこの時期、異なる二つの分野で極めて大きな進展が見られた。

- ・東北地方におけるアイヌ語的地名の分布（金田一京助）の山田秀三による再評価  
1974（昭和49）年、山田秀三「東北の蝦夷がアイヌ語族であったろう」（新野直吉・山田秀三編『北方の古代文化』）
- ・東北地方における北海道系土器文化の分布状態が明確化。  
ことに北海道士着の「北大式土器」が、7世紀の比羅夫北航の頃、道奥国の中樞部だった仙台平野に集中的に出土することなどが注目された。

#### 1969（昭和44）年、山内清男「縄文文化の社会」

「内地北端の江別式は、北海道とともにおそらくはアイヌ文化勢力の領地であり、北進しつつあった古墳文化の最古、最北の勢力とむきあっていた。・・・」

#### 1971（昭和46）年、山内清男「山内清男先生と語る」

「文化圏で言うところらの五世紀頃の土師器の文化とアイヌの文化圏とが盛岡あたりで対峙する、そんなふうに考えたらどんなものでしょうか。」

#### 1971（昭和46）年、伊東信雄<東北大学最終講義>

（奈良時代の蝦夷がすでに狩猟採集本位の段階を脱し、農耕段階にあったことを強調しながらも）「東北北部にアイヌ語地名が多く残っており、また北海道とおなじ遺物が出る以上、東北地方に北海道のアイヌと同じくアイヌ語を話す人間が居住していたことは否定できない。・・・ここで私ははじめて蝦夷をアイヌ系の人種と規定したのである」

#### 1974（昭和49）年、新野直吉「蝦夷とその周辺に関する私見」

「斑状文化」「絳模様の文化伝播」を提唱（清水の「異文化併存の可能性」と共通）

#### 1978（昭和53）年、菊池徹夫「蝦夷論の系譜」

#### 1979（昭和54）年、菊池徹夫「蝦夷論の系譜（承前）」

蝦夷とは何かという問いは、以下のように整理されるだろう、と私は考えていた。

- ・蝦夷は日本古代史上、何だったか？
- ・蝦夷は東日本の先住者だったか？（蝦夷の主な活動域は？）
- ・蝦夷は一般的に農耕民だったか？（蝦夷の主な生業は？）
- ・蝦夷は形質的にアイヌ（系）か？
- ・蝦夷は民族・文化的にアイヌ（系）か？
- ・蝦夷は縄文人とどんな系譜関係を持つか？（蝦夷に石器文化の段階はあったか？）

1979（昭和 54）年、高橋富雄『辺境 もう一つの日本史』

アイヌ説を「古代蝦夷の歴史科学を不可能にした」と批判。方民説をも批判。

「歴史事実の認識の問題としての蝦夷論」とは「蝦夷というあらゆることばで国家外存在とされている人たちが、ほんとうに異民族であったのか。それとも内なる外国人の単なる観念疎外にすぎなかったのか。この疑問に対する歴史科学的な展望をひらくこと」

確かに、もし彼ら蝦夷が、事実上の異民族であったなら、日本は明らかに多民族（少なくとも複数民族）国家であったことになるし、またもし、民族的な差でなくて、同一民族内の単なる政治的・文化的な観念となれば、日本列島に形成された国家は、表面的には単一の日本人の国家でありながら、本質的には西と東のほとんど原理的に異なった二つの集団・社会・歴史で成り立っていたということになりかねず、それはそれで大きな問題となるのでは、とこの段階で私（菊池）は考えていた。

戦後の日本の歴史学では、当然のことながら、戦前の皇国史観への強い反省もあって、いわば法則定立的な歴史科学が主流をなしたから、個別の民族、ましてや形質的な違いといった観念は極力避けられ、もしくは無視されることが多かった。蝦夷論でもこれは例外ではなく、たとえば「特殊史」も究極は「普遍史」のためといった、高橋富雄氏の史観などはまさにそのようなものであった。ところが氏じしん、この時期に至って蝦夷の種族的同定は「日本国家史」のうえでも極めて重大な問題だ、と認めざるを得なくなっていたのは、ここに見るとおりである。

すなわち、このことこそ、まさに、蝦夷論V期（1970年代）の大きな動向を示すものであった。

#### 1980～1990年代の動向

1984（昭和 59）年、菊池徹夫「蝦夷の考古学」

1986（昭和 61）年、高橋崇『蝦夷』

1984年、垂柳遺跡（弥生中期）、1986年、砂沢遺跡（弥生前期）発掘

1991年、埴原和郎の「二重構造論」

1994（平成 6）年、工藤雅樹『考古学から見た古代蝦夷』 「蝦夷中間説」

- 1997（平成9）年、日本考古学協会「蝦夷・国家」  
1998（平成10）年、工藤雅樹『蝦夷と東北古代史』  
1998（平成10）年、工藤雅樹『古代蝦夷の考古学』

## 2000年以降の状況

- 2000（平成12）年、工藤雅樹『古代蝦夷』  
2001（平成13）年、工藤雅樹『蝦夷の古代史』  
2006（平成18）年、松本建速『蝦夷の考古学』「東北蝦夷非実在説」「古墳時代人移住説」  
2011（平成23）年、松本建速『蝦夷とは誰か』  
2018（平成30）年、松本建速『つくられたエミシ』

- ・エミシはアイヌの祖先だが、古代の東北に居たというのは国側の記録だけで、実在はしなかった。
- ・東北地方も縄文時代から5世紀前半ぐらいまでは北海道と同系統の文化で、アイヌ語を話す人々はいた。しかし7世紀以降は本州島の大部分と同じになった。
- ・7世紀以降の東北地方の住民はアイヌ語を話すようなエミシではなく、日本語を話す日本国域からの移住者の人々だった。
- ・7世紀以降のエミシはアイヌ語を話す人々で、アイヌ民族の祖先として北海道に住んでいた。

- 2019（平成31・令和1）年、東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家」  
2020（令和2）年、北上市立博物館特別展「蝦夷の赤い甕—最強の蝦夷は和賀川にいた」  
赤彩球胴甕の問題 8世紀後半～9世紀前半？ 北上川流域、特に現在の北上市周辺。  
奈良末～平安初期は東北38年戦争、坂上田村麻呂・阿弭流為の時代。  
多摩丘陵出土（1996～1997年）の「赤彩球胴甕」は移配蝦夷の土器か？ 帝京大学総合博物館「古代多摩に生きたエミシの謎を追え」

## 結論にかえて——追及はなお続く——

- ・毛人、蝦夷、エミシ、エビス、エゾ、カイなど表記、呼称の問題
- ・アイヌ語系地名の問題
- ・集落、宿营地、キャンプなど居住地跡の調査
- ・城柵、砦、武器、武具など戦闘、軍事的遺構、遺物の調査
- ・生業（採集狩猟、農耕、牧畜、交易等）の実態の解明
- ・北海道系土器文化の東北地方への南下。（青森県猪ノ鼻遺跡の竪穴・土壇で古墳時代前期の古式土器と続縄文土器が多数共伴出土）
- ・「赤彩球胴甕」の問題
- ・天王山遺跡および天王山式土器文化の問題などなど・・・

